

## いつもとは違う保育の場に身を置いて

中澤智子  
(保育士)

私は、二〇一七年九月十九〜二十一日の三日間、熊本市のH保育園にお邪魔させていただきました。前年の秋に「熊本市子ども女性支援ネットKCCW」による社会的保育実践者派遣プロジェクト<sup>註</sup>として本園の保育士二名が伺ったご縁で頂いたお話です。

今の勤務先、お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（以下ナーサリー）で保育に携わり（非常勤も含め）十五年、保育者としてはまだまだ道半ばですが、長くいるからこそ謙虚さを忘れてはいけないと思いがらやって

きたつもりでした。しかし、今回の熊本行きで、それがいかに実践できていなかったかということに気づかされました。

保育者として三日間、他園の保育に入るという経験は初めてのことでした。受け入れる側のH保育園の先生方にとっても、内心、緊張感や構えるところもあったことと思います。が、そのようなそぶりはまったく見せず、温かく迎えてくださいました。実習生でも見学でもなく、他園の保育士を受け入れ、一緒に保育をするということは、保育の中ではあり

中澤智子（なかざわ ともこ）  
お茶の水女子大学附属いずみナーサリー保育士。

そうで、なかなかないことだと思います。

日保育園では、○歳児クラスに入ることで、人見知り強いこの時期に、知らない大人がその場にいるということは、子どもたちにも負担が大きいのでは……と一抹の不安もありましたが、それは杞憂に終わりました。知らない人が入ったからといって揺らぐことのない信頼関係や安心感が、子どもたちと先生の間にしっかりと築かれていたからです。

日保育園で出会った子どもたちに対して、  
「ここにいさせてもらっていいですか？」  
「こなら大丈夫かな」と、その子たちの声にならない声や思いに耳を傾けようと、神経を研ぎ澄しました。先生方に対しても同様で、  
「この人はどんな思いで、どんなスタンスで保育しているのかな？」  
この場面ではどうするのかな」とさりげなさを装いながらも、頭の

中はフル回転でした(装っていると思っているのは自分だけで、周りの先生方も子どもたちも、そのことを了解して受け入れてくれたのだろうな……と後になって思います)。

ナーサリーで無意識に日常のこととしてやってしまっていることを一つ一つ、心の中で確認したり問いかけたりしながら、自分自身の居方や所作を考えると、作業を意識して繰り返し、保育に携わる者として忘れてしまっていた謙虚さを、奥の方から引っ張り出してくる感覚に近かったと思います。

「心を傾ける」「寄り添う」という言葉は、保育の中でよく使われ、私自身使っていました。ナーサリーの日常の中で、できていなかった自分に思い至りました。

その人のことを知りたいと思うところから、保育は始まります。知っているつもり、



わかったつもりでいて、本当のところは見えていなかったり、わかっていなかったりすることもたくさんあるということ、日々、考えているようで、いかに思考せず、日常の中に身を置いていくかを思い知らされた三日間でした。もちろん、たった三日間でわかったとは言えませんが、ナーサリーに戻ってからの、保育に入るときの心のもちようにつながっているように思います。

いつもの日常だけでは気づき得なかったことと、思い至らなかったことを、立ち止まって考える、今までの保育を振り返る、そしてこれからの保育を考える貴重な機会となりました。

今、就学前の子どもが通う施設は、幼稚園、こども園、保育園、公立園、私立園（学校法人・社会福祉法人・企業）、認可園、認可外、……といろいろあり、規模も保育時間も理念や方針も本当にさまざまです。「教育」「保育」

と言葉は違えど、子どもが幸せに自分らしく健やかに育つこと、その育ちゆく力を信じ、育ちを保つことが、子どもの育ちに携わる大人の使命であり責務であることに変わりはありません。

今回は、前述のご縁で、東京から遠く離れた熊本の保育園と交流させていただきましたが、遠い近いの距離ではなく、保育に携わる隣りあう人たちが、これから育ちゆく子どものことを思いながら、少しずつでも人事交流ができるようになっていくといいなと思うようになりました。

園が大切に行っていること、築き上げてきた文化や伝統、背負っているもの、地域性……などそれぞれ違いはあっても、子どもの育ちを支えるという根っこのところは同じです。研修会などで、他園の実践から学び、それを自園の保育に生かすというところから一歩踏

み込んだ交流ができると、新しい何かが生まれるのではないかと思えます。それは目に見えるものでも、すぐに結果が出るものでもないでしょうが……。

もちろん、どこの保育現場も忙しく、人手不足で手いっぱい。それでも子どもにとってより良い保育を目指し、模索しながら一日一日を乗り切っているような状況の中、他園に保育者を一名派遣したり、交換人事のようなことをするのは、一見無謀なことかもしれません。本来子どもが育つ場は安心・安定の場でなければならぬところを、一時期、そうでなくしてしまう危険性もあるわけです。けれども長期的に見ると、揺らぎの中で気づくこと、見えることがあるようにも思うのです。揺らぎながらも、揺らぐだけでなく、揺らぐ中でその時々での着地点を見つけ、揺らいだ分、少しずつしなやかに、おおらかになつて

いくような感覚というか手ごたえが、ナーサリーの中にもあるような気がします。

今、目の前にいる子どもたちと向きあい、子どもの思い、そして一緒に保育をする同僚の思いに心を寄せながら、保育をしている人と人が、園と園が、少しずつさまざまな形でつながっていきけるような道筋を見つけていくと、いいなと思っています。

#### 注

被災地の保育園へ保育者を派遣し、現場保育者の負担軽減、子どもが臆せず遊べる機会をつくることなどを目的として、現地熊本で立ち上がったプロジェクト。立ち上げからプロジェクトにかかわる塩崎美穂氏（日本福祉大学准教授）によれば、「保育の果たす役割がわかっている・身体ひとつで保育ができる・すでにある価値観（生活や保育）を否定しない・親子及び子どもと保育者の関係への支援ができる」ことを参加の要件とする。